

## 百聞は一見にしかず



藤沢北 細谷 実

日韓親善委員会や親善会議の委員をして韓国の方々にも多くの友人ができた。韓国ロータリアンのAさんもその一人である。Aさんはソウルで車の中で、こんな話しをしてくれた。韓国の高校生数名が短期青少年交換の形で日本のあるロータリークラブの会員の家庭に分散して世話になった。そこで彼等は同じ体験をした。それは「聞くとも見るとでは大違いだった」ことだ。

戦後の反日感情たけなわの中で育った韓国の若者に日本人に対する悪感情があるのは当然である。ところが日本人の家庭で暫時暮しているうちに、そこで日本人の親切さにふれて自分達が聞かされていたことが違っていたことを一様に発見したのだ、と。

我々日本人も、一部在日韓国人の行動を見て韓国人全体に偏見を持ってしまった。そこに育った青少年が韓国人に対して悪いイメージを持つてしまった。

だが韓国人の人々ときき合ってみると我々の先入観が間違っていたことがわかる。RI会長主催の親善会議に出席した日本人ロータリアン家族全員がホームビジットに参加して、心のこもったもてなしを受け、韓国人及びその家族のあたたかさを知った。そして韓国人に対するイメージを変えた。それは参加された多数のガバナリーのアンケートのご回答によっても知ることができる。これは親善会議の大きな成果であった。

過去のいきさつから両国民はお互いに好きでない。特に若い人にもこの傾向があるのは両国の将来にとって不幸である。なんとか良い方向にもって行きたい。それにはホームホスピタリティというロータリーの慣用方法を使ったプロジェクトを盛んにするのが効果的である。GSE、ロータリーアクト、インターアクトの短期交換訪問等、特に短期青少年交換は夏休みや春休みを利用して一般高校生を対象に大いにやりたいたいものだ。幸い距離も近く、航空運賃も安い。ソウルから成田まで二時間程だ。クラブの財政でも可能であって地区やRIの補助なしでもできる。

韓国の青少年は日本人の姿を学校に帰って報告するであろう。日本人青少年も同様に母校周囲に韓国人の心の暖かさを話すだろう。彼らは両国のかけはしとなるだろう。

紛争は隣り合った国の間に起きることが多い。今さし当って何事がなくとも隣国との交友親善にはどんなに努力をほらっても払い過ぎることはない。

(第二五九地区 神奈川県 養鵜用機械製造)